

令和元年6月27日現在

機関番号：23901

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K15787

研究課題名（和文）自己実現理論を応用した長期固定型実習導入に向けた調査及び実習方法の構築

研究課題名（英文）Investigation for inducting about the long period clinical placement at the same place which is adapting the Maslow's hierarchy of needs and construction of its training methods

研究代表者

大原 良子 (Ohara, Ryoko)

愛知県立大学・看護学部・教授

研究者番号：40325163

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：実習での実践力についての自己評価を5件法の尺度で、臨地実習終了後の看護学生255名と助産師学生84名からデータを収集した。

結果、同一施設での実習期間が長い助産師よりも看護学生の方が「実習の成果として、さらに患者中心のケアを心がけるようになった」「実習中、時間を管理する能力が向上した」「実習の成果として、より理論と実践を統合することができるようになった」が有意に高かった（ $p < .05$ ）。自己評価では同一施設での実習期間が長い学生が、実習成果を肯定的に評価しているとは言えなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在の看護学臨地実習は、患者の発達段階別に2週間という短い期間で複数を移動する為、看護の実践力が身に付かず、早期離職等につながると考えた。そこで、技術の習得に焦点を置いた1か所に長期に滞在する実習の導入につながるよう、その効果の証明を試みた。自己実現理論をもとに開発された尺度を使用し同一施設での実習が1か月以上と長い助産学生と看護学生を比較した。

所属意識を問う項目では、助産学生の方が有意に高い点の項目が多数あり、人間関係の構築は実習期間が長い方が良いと言えるが、実践力評価は看護学生の方が高かった。今後は客観的に実践力を評価する方法を用いて、実践力のつく臨地実習につながる研究が必要である。

研究成果の概要（英文）： This research was conducted to know the self-valuation of students about competence as nurse or midwife after the clinical placement. Data was gathered from 255 nursing students and 84 midwifery students by using the five-point Likert scale.

Although, midwifery students experience longer clinical placement than nursing students at the same medical institution, nursing student are significantly higher self competence point than midwifery students at the below three items ($p < .05$): "As a result of the placement I am more committed to patient-centered care"; "During the placement I was able to improve my time management skills"; and "I am more able to integrate theory and practice as a result of the placement." It was unable to identify by the self-valuation that the length of same place of clinical placement would improve competence of students' nursing or midwifery skill.

研究分野：臨床看護学 母性看護学 助産学 ウィメンズヘルス

キーワード：看護学臨地実習 自己実現理論 実習場所固定実習

1. 研究開始当初の背景

日本の臨床看護学実習では、看護の対象者の発達段階（小児，成人，老年）または看護分野ごと（母性，精神，在宅）に実習場所を2-3週間程度で移動しながら学習する方法がとられているが，豪州や英国では，1か所に少なくとも3か月は固定して実習を行う事が推奨されている（heath, 2002）。これは，短期に実習場所を移動することが，学生にとってストレスが高く有益ではないこと（英国政府，1999），マズローの自己実現理論からも，長く同一の実習場所にいることで学生の実習施設への帰属意識を培い，それにより学生の学習効果，実習への満足度，自信を培うと言われている（Levett-Jones et al., 2009）。さらに，1か所に長期に固定して実習を行うことで，学生はより多くの専門技術を身につけ，就職後早い段階から即戦力として働くことが可能である。それにより，新人看護師の早期離職の予防にもつながると考える。

2. 研究の目的

(1) 本研究は，日本でも長期固定型の実習が効果的であるという理論的・現実的な基盤を作り，長期固定型導入に結び付けられるようにその有益性を明らかにすることを目的とする。

(2) 長期固定実習を日本に導入することへの調査。

3. 研究の方法

(1) 実習についての学生の自己意識を問う尺度を使用し，看護臨床実習を終えた看護学生と1か所の実習が1か月以上である助産学生の平均点を比較した。尺度は，McCoyら(2013)の「The Ascent to Competence Scale」をもとに「日本語版看護臨床実習での実践力上昇意識尺度」を作成し，使用した。尺度開発者からの使用許可は得られている。この尺度は，マズローの自己実現理論をもとに看護学実習における学生の専門職意識の向上心，臨床適応能力の向上心，実習において修得した実践力についての自己意識を測定するものである。『安全と保安』13項目，『所属意識』22項目，『自己概念』12項目，『学び』22項目，『実践力』10項目の全5カテゴリー，79項目から成り立っている。回答は，0「いいえ」，1「どちらかというといいえ」，2「どちらでもない」，3「どちらかというとはい」，4「はい」の0-4点から選択で求めた。分析は，看護学生・助産学生の2群間の比較をマンホイットニーのU検定を用いて行った。有意水準は，5%未満とした。今回は，両群共に平均点が0.5未満，3.5以上のものは削除した。

(2) 上記調査と同時に，2・3週間という領域別の実習ではなく，1か所に1か月以上固定して看護学の実践力を向上させる実習（以下，長期固定型実習）を導入することについて，看護・助産学生に意見を求めた。

(3) 豪州の大学の看護学臨床実習を調査。長期固定実習の利点，・問題点等について調査を行う。

愛知県立大学研究倫理審査委員会の承認を受け(承認番号 28 愛県大情第 6-9 号)実施した。

表1. 「日本語版看護臨床実習での実践力上昇意識尺度」看護学生と助産学生の比較

項目	看護学生	助産学生	p
	M±SD	M±SD	
安全と保安	看護スタッフは私を歓迎してくれた	3.02±0.82	0.00
	看護師長は私を歓迎してくれた	3.23±0.88	0.00
	実習開始時，師長または指導者は私を看護スタッフに紹介してくれた	3.29±1.14	0.00
	実習中，怖いと感じるような出来事を何回か体験した	2.51±1.25	0.00
所属意識	実習中，スタッフに溶け込めたと感じる	2.35±1.05	0.00
	実習中患者へのケアを見学し，看護の質に失望した	0.62±0.90	0.00
	実習中，私は単なる“手伝人”だと感じた	0.79±1.03	0.00
	私の看護観（助産観）は，実習先の看護スタッフのものに似ていた	2.33±0.91	0.02
	実習中，看護チームの一員のように感じた	2.36±1.10	0.01
	私の価値観は，実習先の看護チームのスタッフのものに似ていた	2.56±0.84	0.00
	実習中，看護スタッフとのつながりはできたと感じる	2.65±0.99	0.00
	私は，指導者とよい関係を築けた	2.76±0.87	0.00
	看護師長は，私が実習環境に溶け込めるよう助けてくれた	2.98±1.02	0.00
	より一生懸命実習に取り組み，スタッフは私により好意的だった	3.02±0.84	0.00
自己概念	病棟のやり方に従うのは，溶け込む上で不可欠だと感じた	3.21±0.82	0.05
	指導者は，患者への看護援助の実施を奨励してくれた	3.27±0.75	0.00
	実習中，私は看護スタッフに支えられていると感じた	3.31±0.87	0.00
	私は，看護スタッフに劣っていると思われたと思う	2.60±1.15	0.01
	指導者は，私を信頼して患者のケアの責任を持たせてくれた	2.76±1.01	0.04
	自分は指導者の負担になっていたと思う	2.92±0.92	0.00
	自分の実習は段階的に自立度が増すように組まれていた	3.08±0.95	0.00
	学ぶことよりも与えられた業務を優先しなければならなかった	1.20±0.98	0.00
	自分の学習目標を達成した	2.49±0.90	0.01
	看護スタッフは実習中の私の成長に興味を持っていた	2.57±0.97	0.00
学び	実習中，看護スタッフは私に教えるために喜んで時間を割いてくれた	2.80±1.00	0.00
	看護師長は私の学びに貢献してくれた	3.10±1.00	0.00
	新しい技術を習得することを奨励してもらえた	3.20±0.92	0.00
	指導者は好意的に私の質問に答えてくれた	3.25±0.83	0.00
	看護スタッフは私の学びに支援的だった	3.35±0.78	0.00
	看護スタッフは，私が職業人として成長するように貢献してくれた	3.37±0.77	0.00
	指導者は私の技術を上達させようとしてくれた	3.46±0.72	0.00
	臨床実習は自分の学びを発展させる動機となった	3.48±0.78	0.01
	私は，臨床技術を習得する機会をたくさん与えられた	3.50±0.69	0.00
	ケアの実施を対象者にお断りする時は，スタッフも口添えしてくれた	3.58±0.68	0.00
実践力	実習中，時間を管理する能力が向上した	2.44±1.06	0.00
	実習の成果として，より理論と実践を統合することができるようになった	2.60±0.87	0.04
	実習の成果として，さらに患者中心のケアを心がけるようになった	2.82±0.87	0.00
	実習は，看護師として働くための準備になった	3.21±0.92	0.01

4. 研究成果

大学の看護学生 255 名及び大学院，専攻科，別科の助産学生 86 名の有効回答を分析した。

(1) 看護学生と助産学生の 2 群間の尺度の平均点の比較 (表 1)

表 1 に示した 33 項目で有意差を認めた。『安全と保全』では，4 項目に有意差を認め，全て助産学生が高かった。『所属意識』では，看護学生が有意に高いもの 2 項目，助産学生が高いもの 11 項目が存在した。看護学生が高かった 2 項目は「実習中，患者へのケアを見学し，看護の質に失望した」「実習中，私は単なる“手伝人”だと感じた」という否定的な内容であった。一方，助産学生が有意に高かった項目は，病棟のスタッフとの関係構築についての項目が多く，すべて肯定的な内容の項目であった。『自己概念』では 4 項目に有意差を認め，全ての項目で助産学生が高かった。肯定的な内容だけでなく「私はスタッフに劣っていると思われたと思う」「自分は指導者の負担になっていたと思う」という否定的な内容も助産学生が高かった。

『学び』では，13 項目に有意差を認めた。否定的な内容を問う項目は「学ぶことよりも与えられた業務を優先しなければならなかった」で，看護学生が高かったが，共に 2 点未満と低い値であった。「自分の学習目標を達成した」という実習の成果の内容も看護学生が有意に高いという結果であった『実践力』では 4 つの項目に有意差を認めた。他のカテゴリーと違い，『実践力』では，肯定的な内容でも看護学生が有意に高く，実習における成果の自己意識が高かったのは，看護学生の方であった。

この尺度はマズローの自己実現理論を基に作成され，この尺度の実践力は，マズローの理論の自己実現の欲求に相当する (McCoy, 2013)。社会的欲求である所属意識が高ければ，自己実現の欲求も高い言う事になるが，助産学生の方が所属意識は高いにもかかわらず，実践力についての認識は低いという結果が得られた。これは，実習の内容が違うという事と，この尺度が，概念を基に作られたが，信頼性・妥当性が得られていないという事が大きな理由である。しかし，看護学生は現在の 2 週間ごとの実習でも，表の『実践力』4 項目において 4 点満点中 2.8 以上と高い点数であり，自己評価が高く，自己実現の欲求は満たされていると言える。

看護学生と助産学生の両方のデータを使用して尺度の因子分析を行ったが，因子が抽出されず，看護学生のみで因子分析を行うことで因子は抽出されたが，マズローの理論に沿った安全欲求，社会的欲求，自尊欲求，自己実現欲求には分類されなかった。さらなる尺度の検討が必要である。

(2) 長期固定型実習に対する看護学生の意見

看護学生 341 名から回答が得られ，賛成 31 名 (16%)，反対 159 名 (47%)，どちらとも言えない (37%)，であり，反対が圧倒的に多かった (表 2)。

回答の理由について賛成 31 名・反対 109 名の意見が得られた。それらの意見を類似した内容でグループ化した (表 3)。

賛成理由は，実践力を身につけたいという理由だけでなく，環境の変化からくる精神的な負担の軽減，実習記録の減少への期待もみられた。反対の理由は，講義演習で学んだ領域の看護を学びたいというものもあったが，就職に向けて自分に合う領域や施設を知ることができる，様々な看護師の技を見る事で勉強なるという理由が多かった。実習の場であっても実践者として自分の技を上達させるよりも客観

表 2. 長期固定型実習導入に対する看護学生の意見 (n=341)

賛成	反対	どちらとも言えない
56 (16%)	159 (47%)	126 (37%)

表 3. 長期固定型実習導入に対する意見の理由

	項目
賛成	知識・技術を深められる (12名)
	実習環境・病棟ルールに慣れ実習効率が上がる (1名)
	スタッフとの人間関係を培う事ができる (4名)
	好きな領域だけの方がやる気が出る (5名)
	実習の記録が減る (1名)
	新しい実習方法にチャレンジすべき (4名)
	人的環境に慣れるという精神的負担が減る (1名)
反対	講義演習学んだ看護は実践まで学びたい (19名)
	全ての領域を知り自分に合う就職先を見出したい (18名)
	多くの看護師の対象・場に合わせたケアをみることで工夫・判断力を学べる (17名)
	全ての領域に興味があり、実践を学びたい (15名)
	経験することで自分に合う領域が分かる (14名)
	多くの病院を体験し、病院の特徴等多くを学びたい (7名)
	多くの看護師に会え、学べる (モデル、目標になる看護師像、看護観を培う) (7名)
	人間関係での精神的強さを培え、適応能力を培える (5名) 等

的な観察者，つまり見学により知識を得る場として看護学実習を捉えていると考えられる。

(1)と(2)の結果から，看護学実習は，主に実践力を磨くというよりも見学を通して実際を知るという学生の認識があり，その認識での実習では達成感が強く実習における成果を得られたと認識し，実践力を看護学実習で得るといふ事とは結び付かないのかもしれない。

(3)2017年，南オーストラリア州アデレードにあるフリンダース大学にて面接等によるデータ収集を行った。同大学では，2000年代早期に長期固定実習(1か所に3か月)を取り入れている。

利点としては，「臨床推論力の向上に重きを置いた実習の展開ができる；実践力が身に付く；臨床に求められている実践者・患者安全能力も身につけた学生の育成が可能；学生の自立度が増す；実習施設への就職者が増加した」などであった。

問題点としては，「成人看護学を展開できる病棟での実習が主であり，その他の領域，特に精神科での実習希望者は少なく，就職者が激減した；患者の侵襲を伴う技術(採血，注射など)・与薬等リスクの高い技術も習得して，就労後すぐから実践が行えるようしなければならず，訴訟などに備えて多くの誓約書の提出が必要；3か月ごとの実習では実習場所の確保が困難で，学生を3つのグループに分け，交代で実習と講義演習を行うため，同じ授業を3回行わなければならず教員の負担が大きい；学生の希望で実習グループ・配置を組んでも，実習が開始した後に変更を希望する学生がとて多く調整が非常に困難である」などであった。

看護学校・病院の数などから，豪州のような実習と講義演習とのローテーションによる実習の方法は，履修単位の多さから日本では困難で，別の方法でなければ，長期固定型実習の導入は困難だと感じた。育成する臨床能力をどこに置くかなど，根本的な看護教育の変更が必要となるため，海外の教育も含めた，時代のニーズに合った教育を模索する必要がある。

引用文献

Heath, P.(2002), *Our duty of care: National Review of Nursing Education*, Department of Education, Training and Youth Affairs.

Levett-Jones, T., Lathlean, J., (2009). The Ascent to Competence conceptual framework: an outcome of a study of belongingness. *Journal of Clinical Nursing*, 18 (20), 2870–2879.

Maslow, AH.(1987). 人間性の心理学 モチベーションとパーソナリティ，産能大出版部。

McCoy M A, Levett-Jones T, & Pitt V. (2013) . Development and psychometric testing of the Ascent to Competence Scale, *Nurse Education Today*, 33, 15–23.

The United Kingdom Central Council for Nursing, Midwifery and Health Visiting.(1999). *Fitness to practice, Protecting the public through professional standards*.

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

曾我部美恵子，大原良子，安東 由佳子(2018). M大学生の看護臨床実習における認識の特徴 - 日本語版実践力上昇尺度を用いた他大学生との比較 - ，*関西看護医療大学紀要*, 10(1), 35-47.

〔学会発表〕(計3件)

Ryoko OHARA, Mieko SOKABE, Takako YASUDA, Misuzu YUGE, Yukako ANDO, Mina YONEKAWA: Perception of safety and security during the clinical placement at Japanese nursing students, The 2nd Asia-Pacific Nursing Research Conference, 2017年8月24日.台北.

Yukako ANDO, Takako YASUDA, Ryoko OHARA, Misuzu YUGE, Mieko SOKABE, Mina YONEKAWA: Japanese Nursing students sense of belongingness during the clinical placement, The 2nd Asia-Pacific Nursing Research Conference, 2017年8月24日.台北.

Ryoko OHARA , Setsuko KAMIYA, Yuki KATSUMURA, Yukako ANDO : Master Course
Midwifery Students' Self Evaluation of Outcome of Clinical Placement: Compared with One-Year
Course Students, The 8th Hong Kong International Nursing Forum, 2018 年 12 月 17-18 日.香港 .

6 . 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：安東 由佳子

ローマ字氏名：Yukako Ando

所属研究機関名：長野県看護大学

部局名：看護学部

職名：教授

研究者番号 (8 桁) : 50314745

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：曾我部 美恵子

ローマ字氏名: Mieko SOKABE

研究協力者氏名：唐沢 泉

ローマ字氏名: Izumi KARASAWA

研究協力者氏名：安田 孝子

ローマ字氏名: Takako YASUDA

研究協力者氏名：弓削 美鈴

ローマ字氏名: Misuzu YUGE

研究協力者氏名：神谷 摂子

ローマ字氏名: Setsuko KAMIYA

研究協力者氏名：米川 美那

ローマ字氏名: Mina YONEKAWA

研究協力者氏名：勝村 友紀

ローマ字氏名: Yuki KATSUMURA